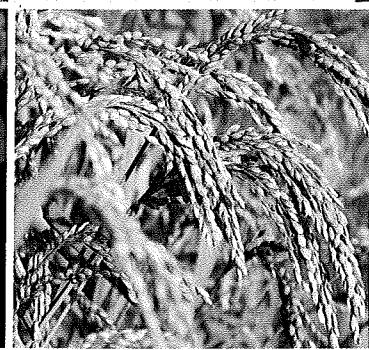
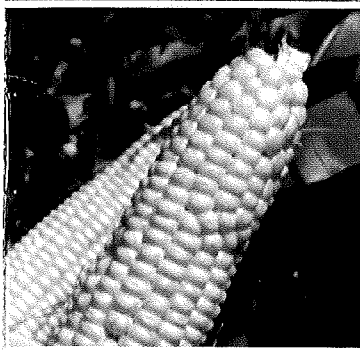
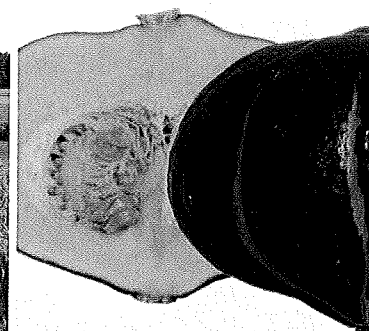
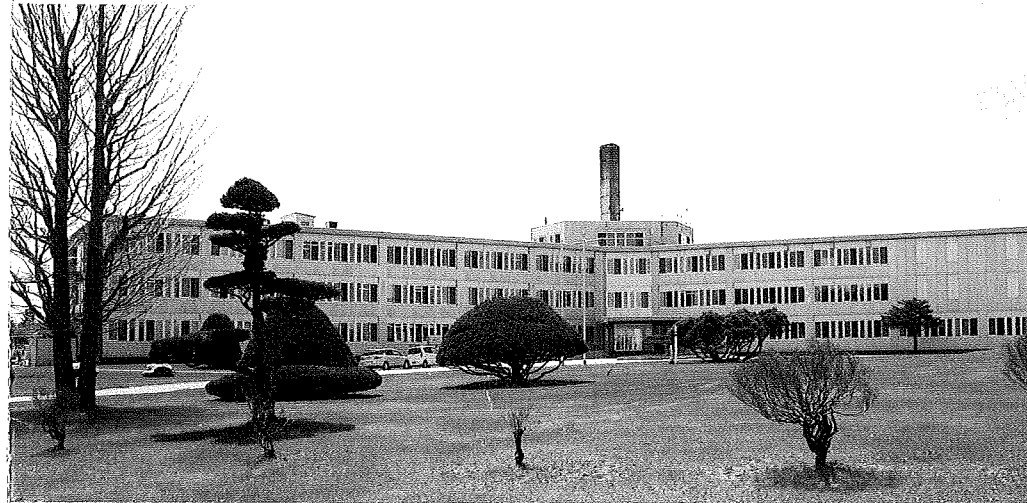
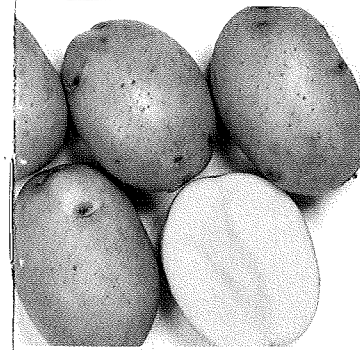


要覧



おいしさ、
深化。
by 北農研



農研機構 北海道農業研究センター
NARO HOKKAIDO AGRICULTURAL RESEARCH CENTER (HARC)

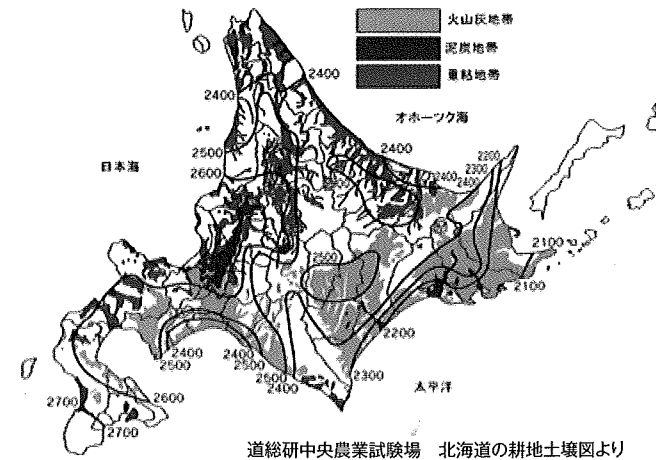
北海道自然条件と農業の特色

北海道では、広大な土地資源を背景に、夏季は冷涼で日長時間や日照時間が長く昼夜の温度格差が大きいという農業適地としての立地を生かし、他の地域に例を見ない大規模な稲作、畑作、酪農が展開されています。生産される農産物はカロリーベースで全国の22%を占め、我が国の主要食料生産地となっています。一方、4年に1度の冷・湿害年の発生や冬季の多雪・極低温、泥炭土・重粘土等の特殊土壌など、農業生産にマイナスの面も持ちあわせています。これらの土地・気象条件を克服し、寒地の未来を支える基盤的研究を進めて行くことが必要となっています。

◆北海道の季候(新平年値 気象庁2001年3月)

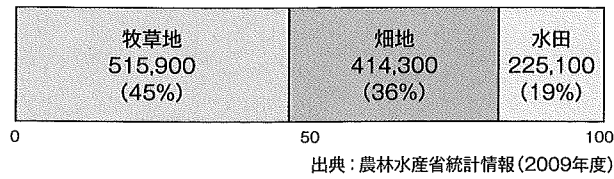
| | 札幌 | 帯広 |
|-----------|------------|-----------|
| 年平均気温 | 8.9℃ | 6.8℃ |
| 8月の平均最高気温 | 26.4℃ | 25.2℃ |
| 1月の平均最低気温 | -7.0℃ | -13.7℃ |
| 年降水量 | 1,117mm | 888mm |
| 降霜期間 | 10/25~4/24 | 10/9~5/15 |
| 降雪期間 | 10/28~4/19 | 11/7~4/25 |

◆北海道の土壌分布と夏期積算温度分布

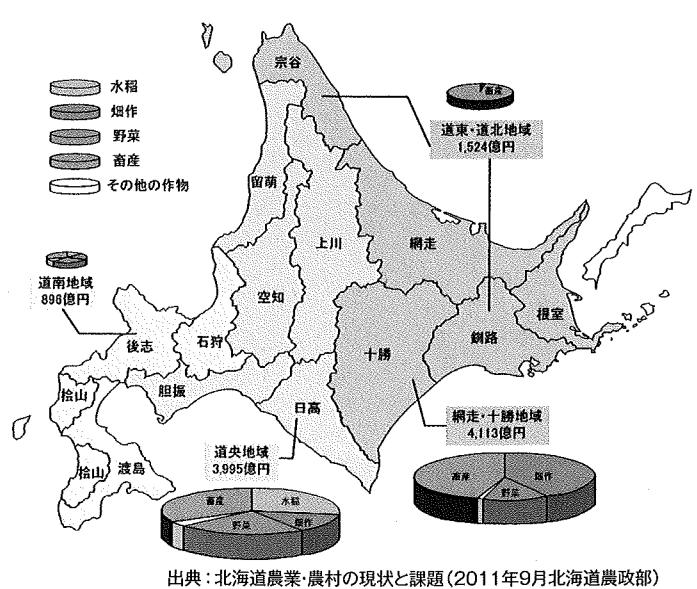


北海道の耕地面積は全国の25%を占め、小麦、大豆、小豆、いんげん、そば、ばれいしょ、てんさい、たまねぎ、スイートコーン、牧草、生乳および牛肉の生産量は全国の首位を占めています。また、農家一戸当たりの耕地面積は全国平均の約11倍である20haに達し、販売農家のうち主業農家が74%を占めるなど農業に基盤をおく経営の多いことが特徴です。このような大規模で専門的な農業経営をさらに強化するために、ブランド化をめざした品種育成や高付加価値の加工品などを開発するための研究を進めて行くことが必要となっています。

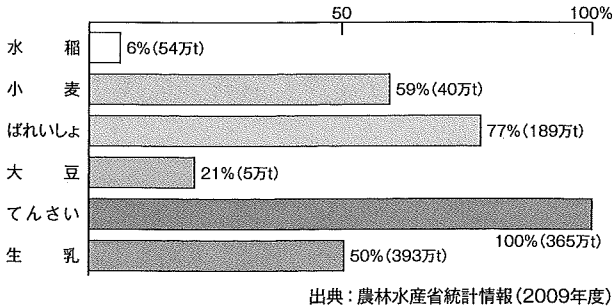
◆北海道の耕地面積(比率) 総面積1,158,000ha(対全国比25%)



◆北海道の地域別農業産出額



◆わが国の農業生産に占める北海道のシェア



北海道では、地形、土壌および気象条件が地域によって著しく異なり、各地に適した農業や畜産が展開していることも大きな特徴です。道央地域は石狩川流域を中心に水田作が主に展開し、また、大都市札幌に近いことから野菜類の生産も盛んです。道東・道北地域は典型的な酪農地帯で、このうち釧路、根室、宗谷地方では生乳・乳用牛だけで農業産出額の多くを占めています。また、道東地域のうち十勝・網走地方では畑作が盛んで、麦類、豆類、てんさい、ばれいしょ等の畑作物、たまねぎなどの野菜が生産されています。道南地域は野菜・果樹生産が盛んで、加えて稲作、畑作および畜産も展開されています。これら多彩に展開する地域農業の営農形態を踏まえつつ、生産技術体系を革新し競争力の強化に貢献する研究を進めて行くことが必要となっています。

北海道農業研究センター紹介

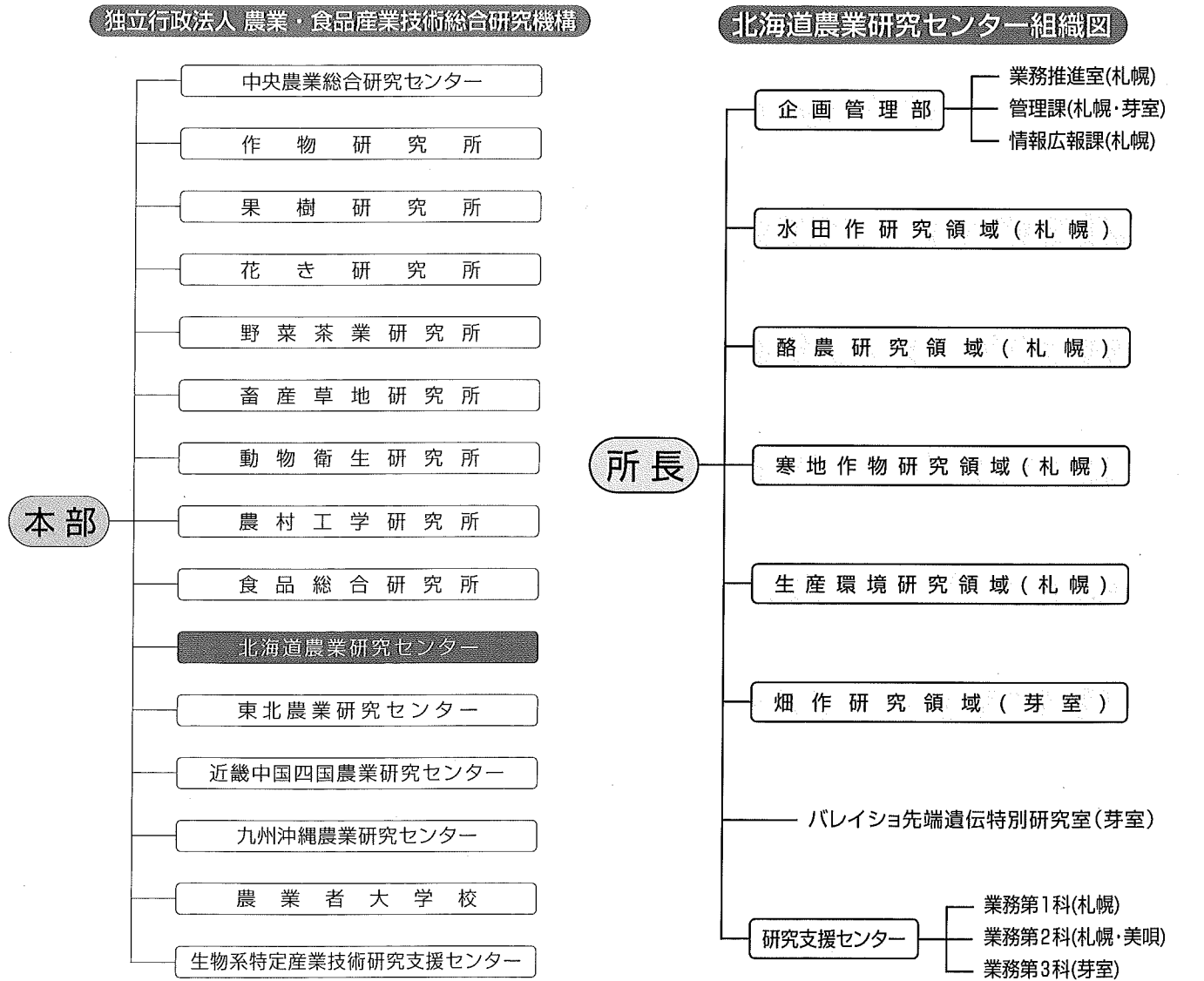
■北海道農業研究センターの使命と研究推進の方向

北海道農業研究センターは、寒地農業のさらなる発展により、国民の皆様に安全で安心な食料を安定的に提供するため、新しい農業技術を開発していくという使命を担っています。このため、日本最大の農業研究機関である農研機構(独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構)の一員として全国に広がる研究所間のネットワークを最大限活用し、長期的な視点に立った地球温暖化、環境保全、バイオマス、バイオテクなどの研究を手がけるとともに、新しい品種、作業技術、家畜飼養法や食品などについても先導的・基盤的研究を行い、道立総合研究機構を始めとする道内外研究機関と連携しながら現場への技術定着を進めています。

組織は、所長以下、企画管理部門、専門分野別に分かれた5つの研究領域、研究支援センターから構成され、中期計画に基づき研究を進めています。

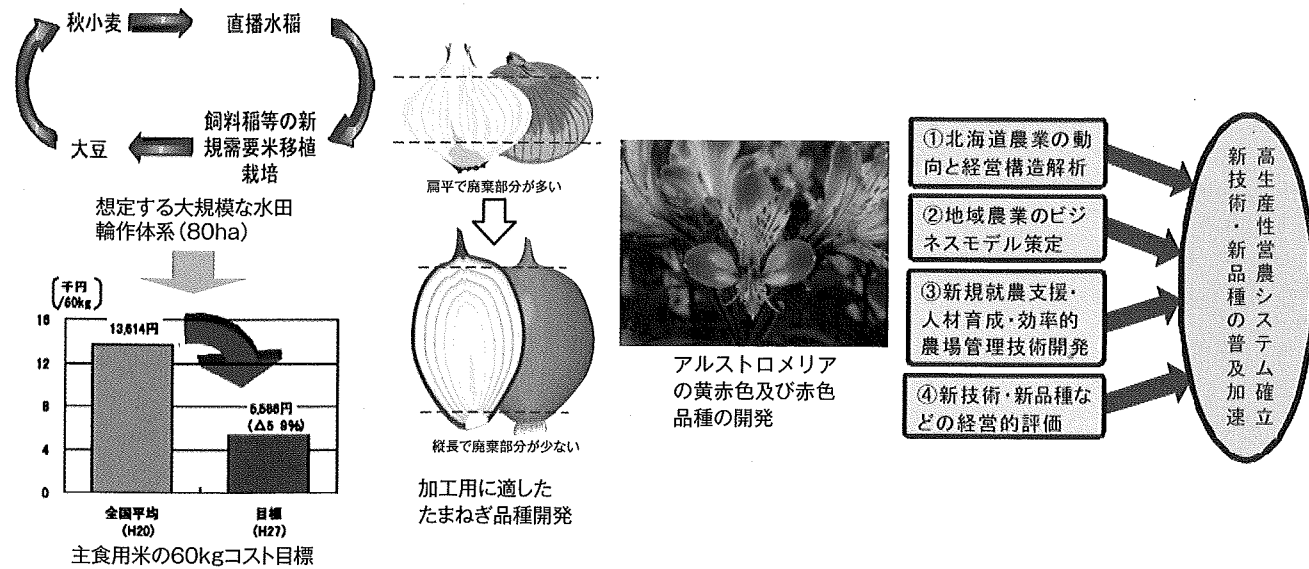
第2期中期計画期間(平成18~22年度)において、画期的なパン用小麦や病虫害抵抗性を有する新バレイショ品種、「泌乳持続性」に基づく乳牛の選抜法などを開発してきた事をさらに発展させ、第3期中期計画期間(平成23~27年度)では低温等の環境ストレスに強い農産物を作る基礎的研究、さらなる寒地向け品種開発、国産飼料の新給与法、大規模農業に不可欠なIT技術その他の研究開発を一層進めていきます。

■組織



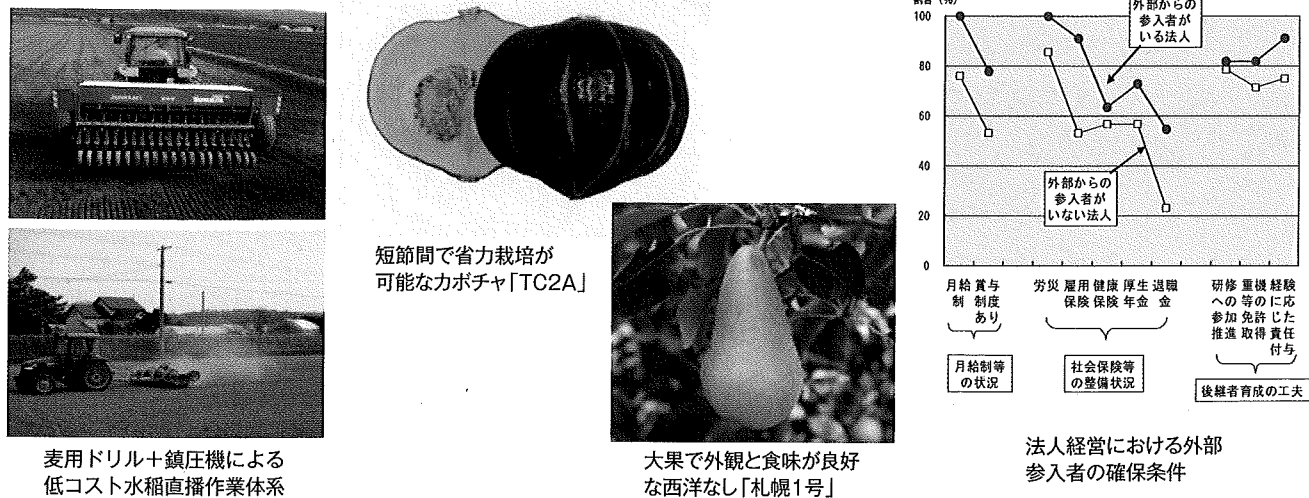
めざす主な研究目標

- 生産コストの大幅削減を目指し、高速で作業ができる農作業機を利用した省力的な大規模水田輪作システムを確立します。
- 業務用に適した品質の露地野菜品種を開発し、国産シェアの回復を目指します。また、寒地の条件に適した品質の良い果樹や新しい色や形の花を育成します。
- 新しい技術や新品種の普及を加速させるために、新技術や新品種導入による経営改善効果の評価を行います。また、地域農業活性化のためのビジネスモデルや新規就農促進のための人材育成方を策定します。



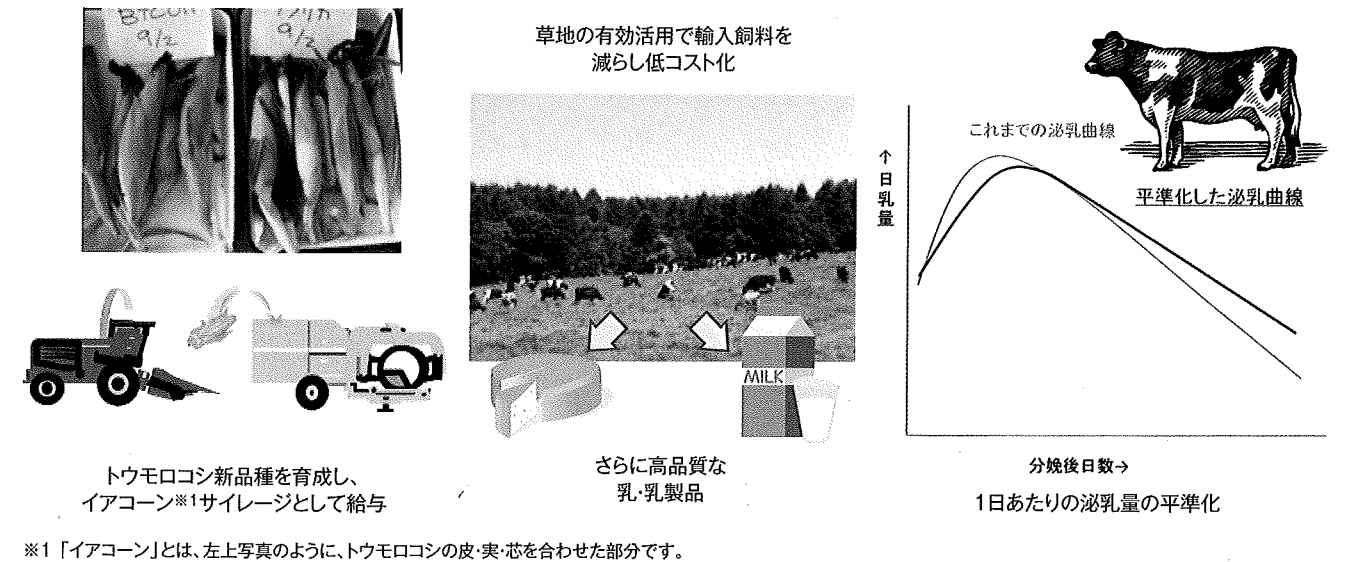
これまでの主な研究成果

- 北海道における水稲の乾田直播栽培において、地域に広く普及している麦用グレーンドリル（播種機）などを利用する低コスト水稲直播作業体系を開発しました。
- 短節間で省力栽培ができるカボチャ品種「TC2A」及び大果で外観と食味が良好な早生の西洋なし品種「札幌1号」、ブルーベリー新品種「ケラアンブルー」「エビルカブルー」を育成しました。
- 2015年の農業構造と担い手規模を予測するとともに、今後の担い手と期待される法人経営での外部参入者の確保条件を明らかにしました。



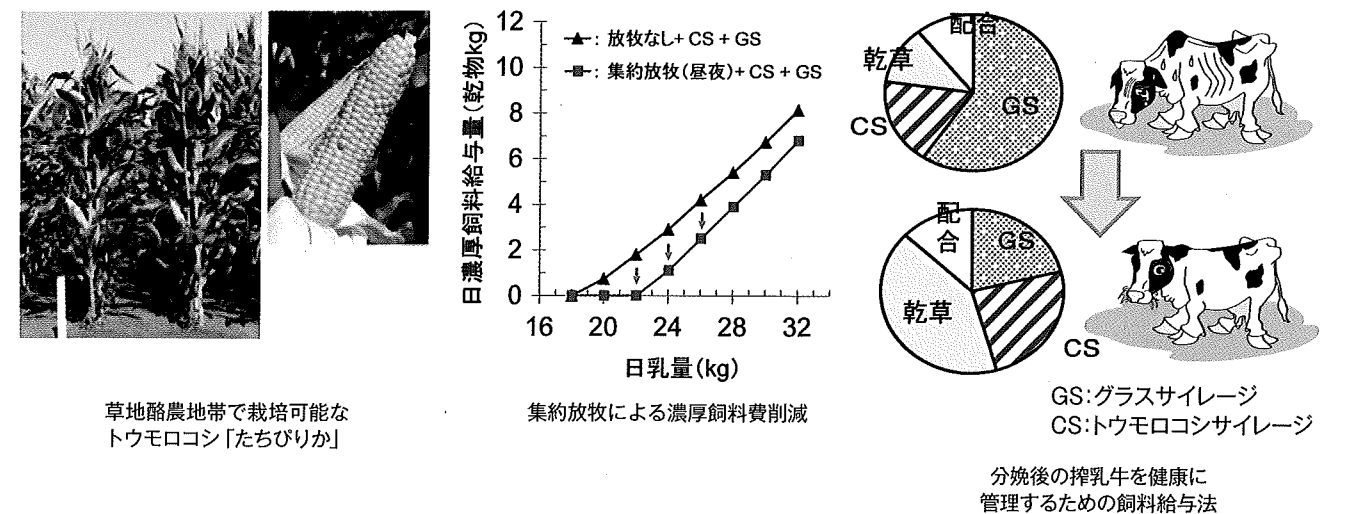
めざす主な研究目標

- 耕種農家と畜産農家が協力して、家畜排泄物などの資源を循環利用し、環境への影響が少なく、低コストで栄養価の高い自給飼料を生産利用する酪農経営をめざします。
- 放牧などで草地を最大限に活用した酪農による低コストで高品質な牛乳・乳製品の生産をめざします。
- 乳牛の生産能力を改良して健康で飼いやすい牛群による酪農経営をめざします。
- 寒さや病気に強く、サイレージ品質や混播適性の高い牧草やトウモロコシ品種を育成します。
- 飼料作物生産と両立可能な資源作物や家畜排泄物を有効利用したバイオマス生産技術の開発をめざします。



これまでの主な研究成果

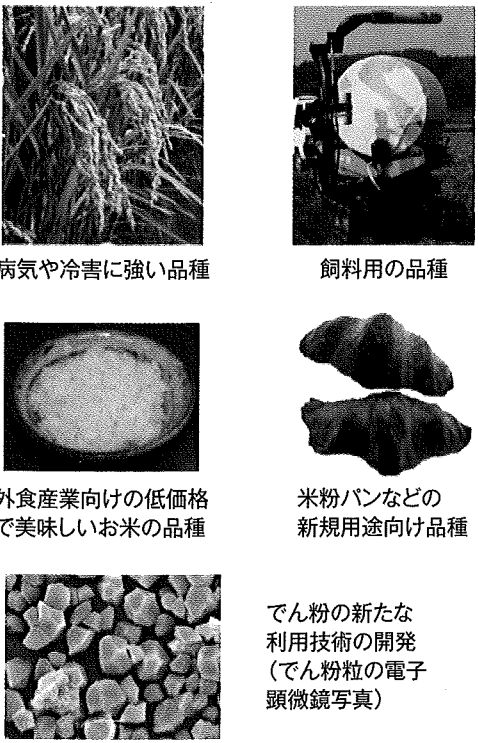
- 栽培可能地域を拡大できるサイレージ用トウモロコシや、集約放牧に適したメドウフェスク、シロクローバ等の新品種を育成しました。
- 濃厚飼料費の低減に向けトウモロコシサイレージを併給する集約放牧技術※2を開発しました。
- 乳牛の分娩後のケトosis※3発症低減に向け乾乳後期にグラスサイレージを制限して乾草を多給する技術を開発しました。



※2「集約放牧」とは、牧草地を小さく区切って、良い状態の牧草を順番に牛に食べさせることで生産性を高める放牧方法です。
※3「ケトosis」とは、分娩前後の乳牛がエネルギー不足などから体調不良になることです。

めざす主な研究目標

- 米粉パンや外食産業などの新しい用途に適した品質や、耐病性、耐冷性、直播適性にすぐれた水稻の品種を育成します。
- 米のでん粉などの性質を活かした新たな米粉利用技術を開発します。
- 多収で栽培に手間のかからない飼料用の水稻品種を育成します。
- 水稻の耐冷性、コムギの越冬性やダイズの耐冷性の仕組みを明らかにして、関連する有用な遺伝子を利用するための技術や品種改良のための素材を開発します。



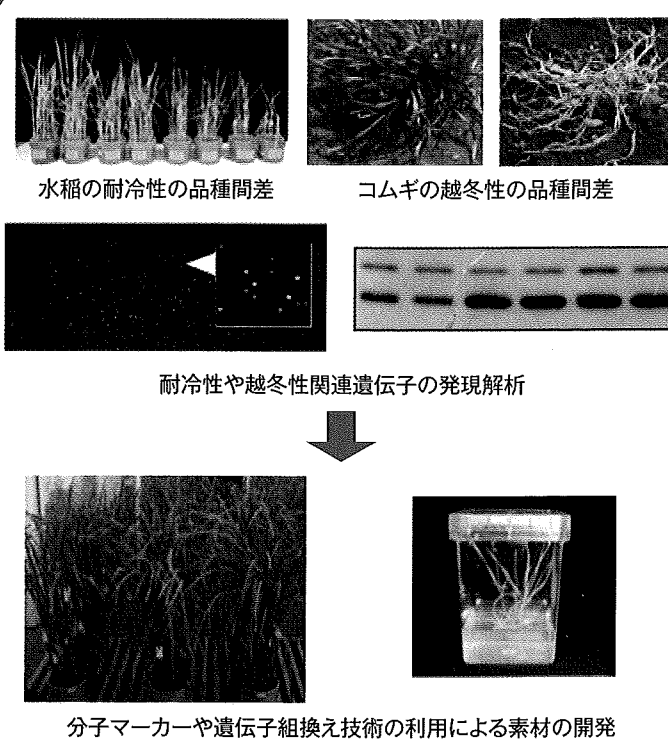
病気や冷害に強い品種

飼料用の品種

外食産業向けの低価格で美味しいお米の品種

米粉パンなどの新規用途向け品種

でん粉の新たな利用技術の開発 (でん粉粒の電子顕微鏡写真)



水稻の耐冷性の品種間差

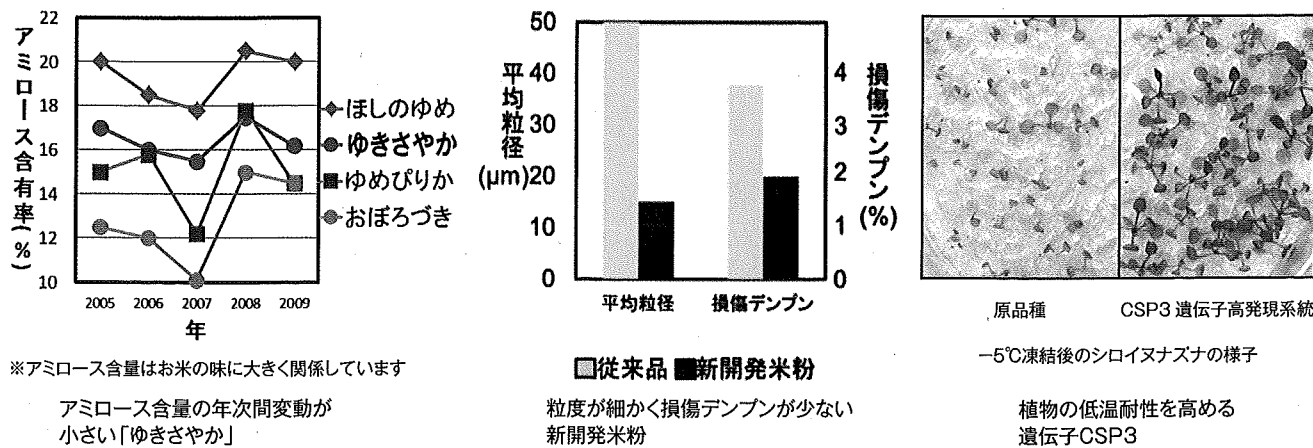
コムギの越冬性の品種間差

耐冷性や越冬性関連遺伝子の発現解析

分子マーカーや遺伝子組換え技術の利用による素材の開発

これまでの主な研究成果

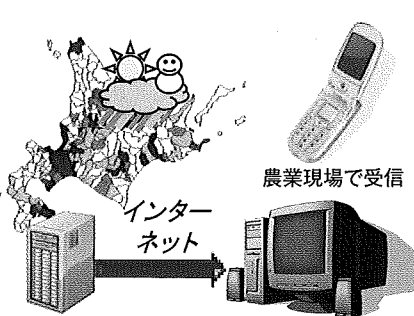
- 食味の年次変動が小さい新タイプ的水稻品種「ゆきさやか」を育成しました。
- 粒度が細かく損傷デンプンが少ない上質の米粉を低コストで製造する技術を開発しました。
- 植物を寒さに強くする遺伝子 (CSP3遺伝子) を発見しました。



めざす主な研究目標

- 気象災害の軽減対応の情報を提供する早期警戒システムを開発します。
- 気候変動や温暖化を緩和するとともに、適応していくための栽培技術を開発します。
- 作物の根圏土壌に生息する微生物の働きを利用した循環型農業をつくります。
- 土壌病原菌やセンチュウ類による作物被害を防ぐ技術を開発します。
- 天敵が生息、活動しやすい環境を作る圃場管理方法を開発します。


早期警戒システム



インターネット 農業現場で受信

早期警戒システムで、冷害・猛暑・病害虫を予測して、何をしたらよいかをすばやく発信します。

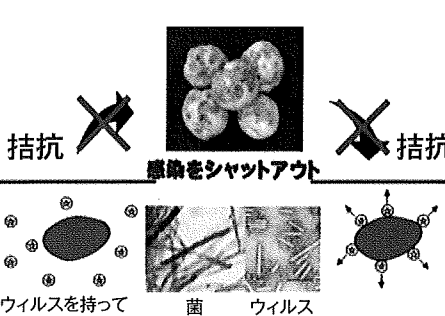
循環型農業



根圏 空素 リン

根圏土壌で微生物、植物の機能を活用して、物質循環を進めます。

生物機能を利用した病害虫防除



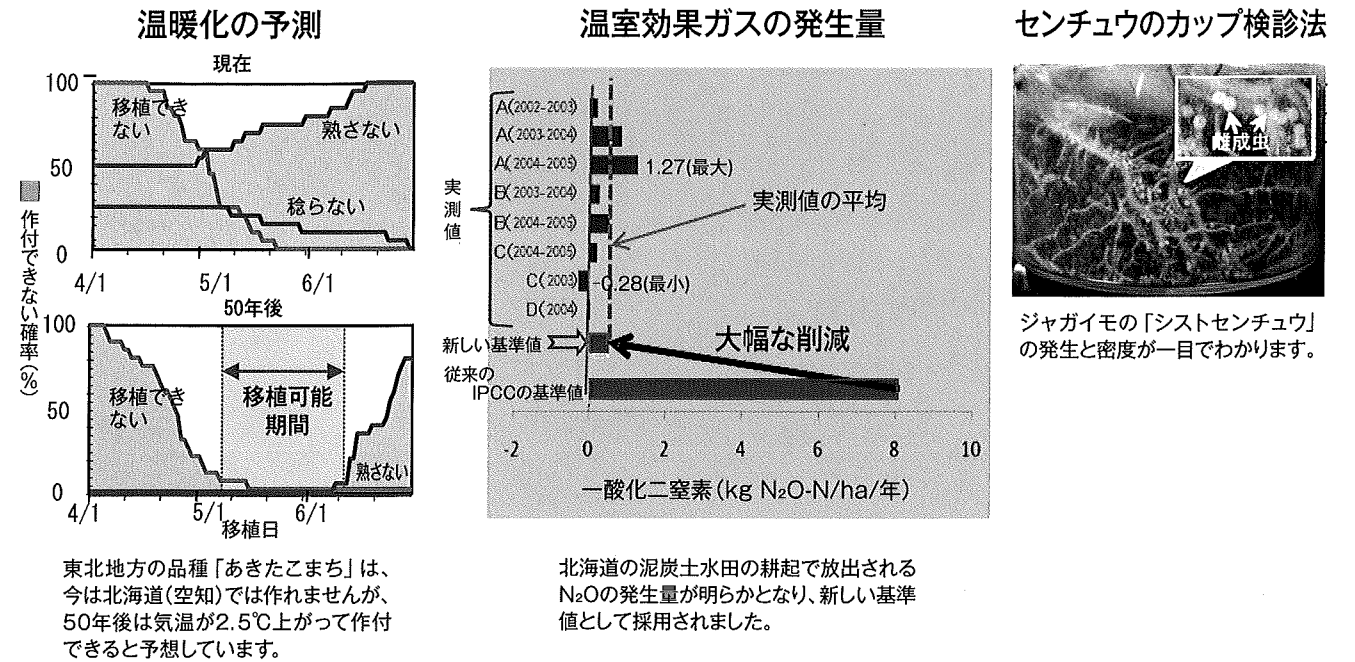
拮抗 感染をシャットアウト 拮抗

ウイルスを持っている菌 菌 ウイルス

拮抗菌などの生物機能を使って、ジャガイモ等の土壌病原菌やセンチュウの感染をシャットアウトします。

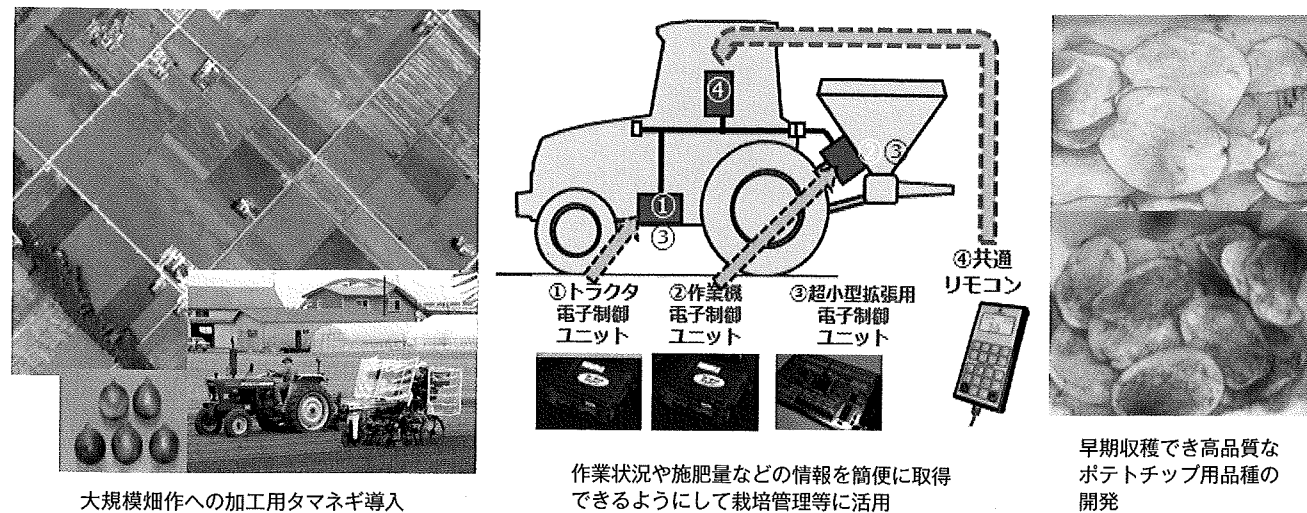
これまでの主な研究成果

- 北海道が温暖化していく中で、将来どのような品種のイネをいつ植えたら良いか予測しました。
- 温室効果ガス発生量を精密に計測し、泥炭土壌のN₂O発生量の基準値を明らかにしました。
- 目に見えない土壌中のセンチュウを簡単に高精度で見つけ出す簡易な方法を開発しました。



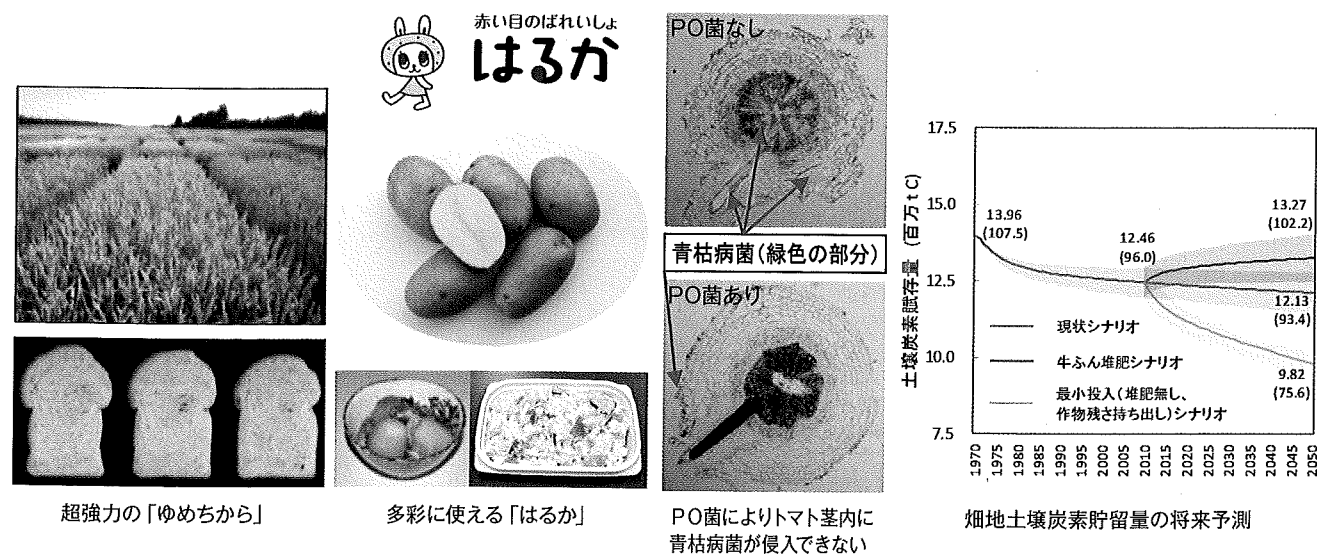
めざす主な研究目標

- 業務・加工用タマネギの導入による50ha規模の畑輪作技術体系の確立を目指します。
- 化学農業に頼らない病害防除技術、温暖化を緩和できる畑地の管理技術を開発します。
- 大規模畑作経営における栽培管理や作業効率改善のための情報収集・活用技術を開発します。
- 海外に対抗できる品種開発や貯蔵技術開発などによる国産加工原料用バレイシヨの周年供給技術を開立します。
- 中華麺に適した品質の小麦や機能性成分のルチンが多く味の良いダツタンソバ等の品種を開発します。



これまでの主な研究成果

- 超強力（ちようきょうりき）秋播き小麦品種「ゆめちから」を育成しました。中力粉とのブレンドにより、非常においしいパンをつくることができます。
- 綺麗な白肉で、食味が良く、サラダ、コロッケなど様々な食品に使えるばれいしょ「はるか」を育成しました。
- 生物防除微生物（*Pythium oligandrum* : PO）によるトマト青枯病抑制効果を解明し、PO製剤を開発しました。
- 土壌炭素動態モデルを用いて十勝地域の土壌炭素貯留量の将来予測を行いました。土壌炭素の貯留量を減らして土壌からのCO₂の排出を増やさないようにするためには、収穫残さや緑肥栽培の適切な利用が重要であることが分かりました。

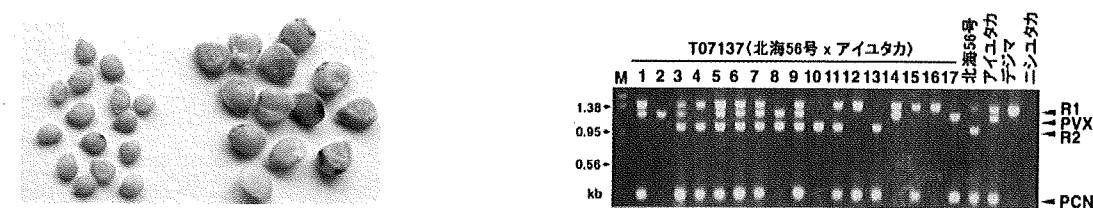


設置の経緯

民間企業からの寄附金により平成22年4月1日に新設された研究室です。野生種のもつ遺伝形質を栽培種に取り入れるための基礎的研究などを推進し、畑作研究領域で行っている新品種育成との相乗効果を目指します。このような寄附による新組織の設置は、農研機構では初めてのことです。

めざす主な研究目標

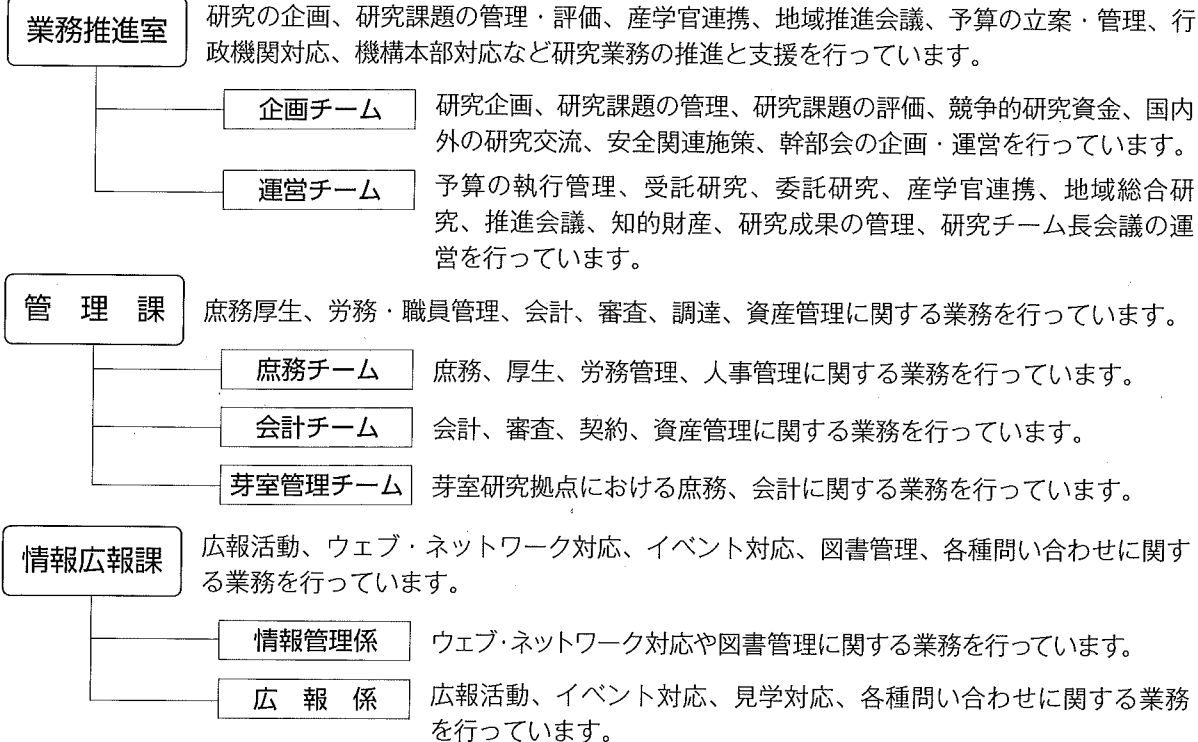
- バレイシヨ雑種強勢機構の解明
- 雑種子形成機構の解明
- 分子マーカーを利用したバレイシヨ品種の遺伝的多様性の再評価
- 病害複合抵抗性品種育成のための技術開発



種間の拒絶反応により、雑種子の大きさや発芽能力が異なる

DNAマーカーを利用した迅速な選抜技術の開発

企画管理部

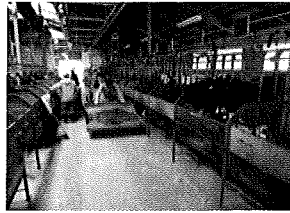


研究支援センター

研究推進上不可欠な家畜の飼養やほ場での作物栽培、研究データとりまとめのための各種作業等について、農業試験研究特有の手法により実施するとともに、研究部門で作り出される新規作物、新しい農業技術をほ場で実証する等の業務を担当しています。

業務第1科 (札幌)

乳牛の泌乳曲線平準化による省力技術、草地の高度利用による乳製品の高付加価値化、自給濃厚飼料イアコーンの生産利用等の分野を担当しています。



泌乳牛を供試した給餌試験

業務第2科 (札幌・美唄)

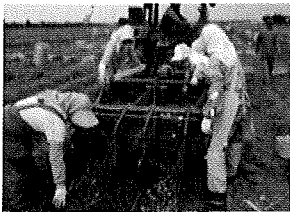
飼料米や米粉等の加工・業務用水稲、生物機能を活用した養分吸収や病害防除、歩留まりの高いタマネギ品種、気象変動に対応した早期警戒システム等の分野を担当しています。



タマネギ育種のための栽培試験

業務第3科 (芽室)

加工用タマネギ等の野菜を入れた輪作体系、周年供給できるパレイショ品種、パン・中華麺等の用途別小麦品種、IT利用による大規模農業基盤技術等の分野を担当しています。



パレイショの品種別収量調査

沿革

- 1901(明34)：北海道農事試験場を札幌農学校附属第2農場の一部に設置
- 1925(大14)：北海道農事試験場本場(琴似)新庁舎竣工
- 1942(昭17)：北海道農事試験場・北海道庁種畜場・北海道庁種羊場を併合し、北海道農業試験場を設置
- 1950(昭25)：北海道農業試験場(国立)と北海道立農業試験場に分離
- 1966(昭41)：北海道農業試験場は現在地(羊ヶ丘)に移転
- 2001(平13)：独立行政法人 農業技術研究機構 北海道農業研究センターに再編
- 2003(平15)：独立行政法人 農業・生物系特定産業技術研究機構 北海道農業研究センター
- 2006(平18)：独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター

用地

| 所在地 | 建物敷地 | 畑 | 水田 | 採草放牧地 | 山林その他 | 合計 |
|--------|------|-------|-----|-------|-------|-------|
| 羊ヶ丘 | 34.4 | 190.7 | 6.5 | 150.7 | 440.7 | 823.0 |
| 芽室研究拠点 | 10.1 | 89.5 | — | — | 3.1 | 102.7 |
| 美唄試験地 | 0.9 | 2.3 | 1.7 | — | 50.1 | 55.0 |

単位:ha

動物頭数

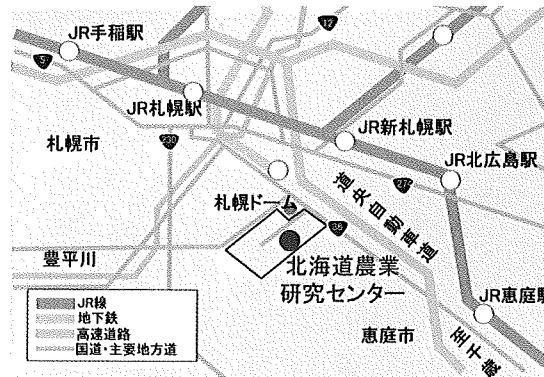
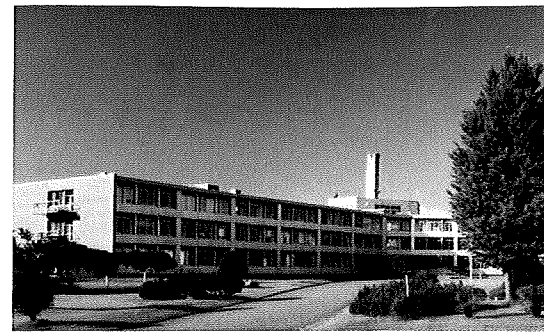
| | |
|-----|-----|
| 乳牛 | 90頭 |
| 肉牛 | 30頭 |
| めん羊 | 56頭 |

職員数

| | |
|-------|------|
| 指定職 | 1名 |
| 一般職 | 45名 |
| 技術専門職 | 72名 |
| 研究職 | 144名 |
| 合計 | 262名 |

(用地、動物頭数、職員数は、平成24年1月現在)

札幌



〒062-8555 札幌市豊平区羊ヶ丘1番地
TEL.011-851-9141(代表)

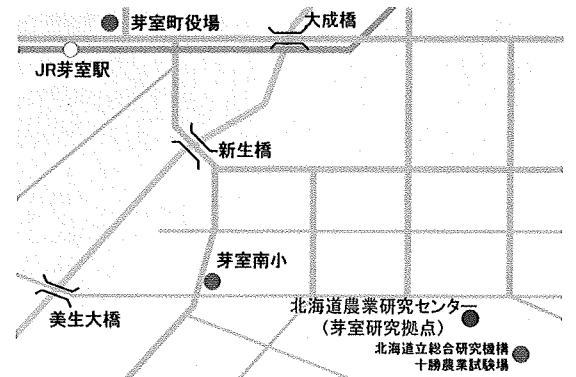
アクセス
 ★札幌駅 地下鉄東豊線 → 福住駅 中央バス → 月寒東1条19丁目 → 北海道農業研究センター
 13分 徒歩 4分 15分
 ★千歳空港 中央バス・北都交通 → 月寒東1条19丁目 徒歩 → 北海道農業研究センター
 48分 15分

美唄試験地

〒072-0045 美唄市開発町南
TEL.0126-63-3005

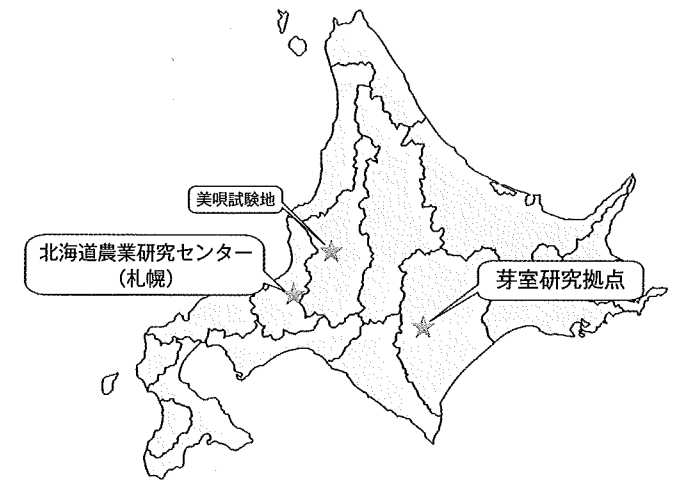
アクセス
 ★JR美唄駅 4.5km 車 → 美唄試験地
 10分

芽室研究拠点



〒082-0081 河西郡芽室町新生南9-4
TEL.0155-62-2721(代表)

アクセス
 ★とち帯広空港 25km 十勝バス → 帯広駅 13.6km JR → 芽室駅 4.5km 車 → 芽室研究拠点
 40分 20分 10分



お問い合わせ

企画管理部 情報広報課 TEL(011)857-9260
<http://cryo.naro.affrc.go.jp>